内村鑑三・ロマ書の研究（第7講）より抜粋

問題の提出（１）ロマ1章16-17節

福音は力である。神の力である。悔い改め、信仰、慰藉、愛、平安、歓喜、勇気、希望ーこの世の哲学倫理の供し得ざるものーこれを与えうる力が福音にある。…

「力」の原語はドゥナミス（ギリシャ語）である。英語のdynamics（力学）、dynamo（発電機）等はこの語より出たものであり、またかのdynamite（ダイナマイト）もそうである。

ダイナマイトは元来罪悪遂行の器として発明されたものではない。文明の開発を目的として発明されたものである。近代の文明がいかに鉄道に負うところ多いかを考える時、鉄路を通すべく岩石を砕くダイナマイトの偉功をたたえざるを得ない。一小片をもって巨大なる岩石をみじんに砕き得るはこれである。ゆえにダイナマイトは力の絶好なる代表者である。

福音は実にダイナマイトのごときカあるものである。これに比しては、倫理道徳はツルハシをもって堅岩を砕かんとするがごとき道である。福音のダイナマイトひとたび我を打つや、倫理道徳をもっては到底除き得ざりし執拗なる我執の岩も飛散し去るのである。

福音は神の力である。ゆえにパウロは福音を恥としないのである。しかり、まことに福音は神の力である。しかしその神の力なることは、その力に触れてみて初めてわかることである。そしてある人はこれに触れ、ある人はこれに触れない。従って福音はある人にとっては力であり、ある人にとっては力でない。

さらばそれはいかなる人々にとって力であるのか。パウロは言う、「信じるすべての人にとって」その人の救いを生むべき神の力であると。信じる者は一人残らずーその一人ひとりにとって一福音は救いを得させる力である。

信仰ーこれが救いにあずかるに要する唯一の条件である。他の条件は一つもない。ただ信じるというだけの条件である。そしてその信仰は必ずしも強きを要しないのである。もちろん強きを貴ぶけれども、弱き信仰とても、いやしくも虚偽の信仰であらぬかぎりは、その持ち主をして救いを得させるのである。ただの信仰、神とキリストに対する信仰、神を父としキリストを主として仰ぎ見ること、それだけで救いに入るのである。

実に簡単である。長き努力によって悟りの境地に到達して救われるのではない。一生涯の努力をもって善行を山と積んで救われるのではない。ただの信仰、信頼、それによって救われるのである。「信じるすべての人」である。信じる者はだれでもである。その遺伝のいかんはもちろん問題とならぬ。その知識、人格、徳行等ももちろん問題とならぬ。

いかなる悪しき祖先や父母を有する者にも、不幸にしてその脈管の中に汚濁の血を有する者にても、ただ信仰によって救われる。その人格において低き者といえども、ただの信仰によって救われる。信仰に入りし後においてその人格の向上を生むべきも、そはまた別個の問題である。

同時に、人格において高等なる者といえども、信仰なくば救われない。人格の高下ということは、救いということを離れて他の標準において眺める時は、充分に問題となることである。ただ救いのことにおいては、これは問題とならぬのである。その他、知識、徳行、技能等、いずれもみな問題とはならぬのである。

「信じるすべての人」の一句を、さらに次の17節と合わせ見て、ロマ書の主題の性質が信仰中心なることが察知せられる。この両節はロマ書本館の入口に掲げられてある大標語であるが、これを読みし者は、いまだ本館に入らずして、本館の中心が信仰にあることを察知するのである。

信じるすべての人が救われるという。まことに福音の福音たるゆえんがここに存する。このことの容易に受け入れがたき理由は、それがあまりにもありがたきことなるゆえである。
多くの人は、何か自己において資格を作りて後、救いの門戸に受け入れられようと計る。従って自己の無資格を痛嘆哀哭するうちに幾年かの貴き歳月をむなしく流れさするのである。

また先天的欠陥を有する者はこの欠陥のおおいがたきを感じて、救いに関しては全き絶望におちいるに至る。遺伝による悪事、先天的の病患、後天的の諸悪、知識と徳行と品性との不足、自己の上に積み重なりし罪悪の深重ーいずれもこれ我が救いの妨げとなるものではない。
ただの信仰によりて救われる。その信仰の弱きさえも、救いを得させるにはーその信仰が持続さえすればー妨げとならぬのである。

かく福音は、信じる者には救いを得させる力である。このことがロマ書本館の戸口に大書きされてあるを見て、我らはまず少なからぬ歓喜と平安の予感を味わい、本館内部の性質をも察し得るがごとく思われて、かくのごとき福音なれば我のごとき罪人をも救いを得、との希望をここに抱くのである。